

読書 「門」 梗概

- 1、 一文が長く、やや諧謔味を帯びた冒頭である。秋日和の長閑な風景の中に切り取られた夫婦関係は、今後如何様に展開されていくことになるのか。字が分らなくなるというのは、ワープロに頼る今日こそ切実な問題で、神経衰弱でなくとも宗助の感覚に納得がいく。
- 2、 息の長い文が続く。そして、崖の描写が非常に印象的である。迫り来るものとわずかに美しいものと、危うきものと不動のものと、そうした二面性を象徴しているかのごとくである。何気ない夫婦の日常の様子背後に、何ものかが潜んでいる予感がよぎる。
- 3、 御米と小六の会話もまた日常の他愛のないものである。御米の「女学生流」というのがどのようなものか、今となっては想像もつかないが、当時の読者はこうした表現を見ただけで、微妙なアクセントやイントネーションを明確に思い浮かべることができたのであろう。
- 4、 漱石はこの『門』において、明らかに意図的に文体を変えている。饒舌体というのか、戯作調というのか、後の太宰につながるような文体になっている。休日に乗合わせた電車内で得られる妙に新鮮な感覚は、都会人ならではのものであろう。
- 5、 宗助のネガティブシンキングが垣間見られるが、その経緯が次第に明らかになっていくような伏線が張られているようでもある。駿河台下の街並みは、現在は大きく変わってしまっているが、それでも書店が並び、時計、雑貨、呉服の店が集まる往時の姿は容易に想像できる。
- 6、 サラリーマンの日曜の心情が、妙に生々しく描かれる。おそらくこうした感覚は、200年前にはあり得なかったのであろうが、100年前は現代とまったく変わらない。長屋や武家屋敷ではなく、戸建の貸家が登場したことによる生活スタイルの変化も、その背景にある。
- 7、 サラリーマンの悲哀というテーマは、果たして漱石に始まるものなのであろうか。鷗外の短編などを見ていると、現実に役所勤めをしていた作者の視点からもう少し異なるとらえ方がされている。執筆時にはいわゆるサラリーマンをしていなかった漱石の紡ぎ出すリアルな描写。
- 8、 日常性の中に入り込む伊藤公暗殺。これに対する宗助の「伊藤さん見たような人は、哈爾賓へ行って殺される方がいいんだよ」、「伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覧、こうは行かないよ」という言にはただ驚かされる。大逆事件が発覚する数か月前の新聞紙上に掲載されているのである。
- 9、 子供の話を機に「生温い眼を挙げて」御米を見る宗助と、「ついと茶の

間へ立って」行ってしまい、「何にもしずに、長火鉢に寄り掛かって」いる御米。小津映画の原節子の演技が髣髴とするような場面である。日常性の中に潜む非情の構図である。

- 10、 日常の描写が果てしなく続いていく。そして、会話のうちよりは、むしろノンヴァーバルな部分で、夫婦間の微妙な軋みが描かれているように感じられる。その正体は何なのか、ほんの僅かずつ種明かしがされていくような仕掛けが施されているように思う。
- 11、 夫婦関係から兄弟関係へ説明的に移ろっていく場面である。夫婦関係については、やや思わせぶりの謎が仕掛けられているように感じられるが、兄弟関係については、とにかく似た者同士として描かれていく。ここまでの登場人物を見る限り、そのいずれもが予定調和的に配置されているかの如くである。
- 12、 回想のシーンで、小六との関係が次第に解き明かされてくる。一方で、佐伯との関係は、金銭問題が絡んでくるだけに、複雑な様相を帯びてくる。一見平和そうな家庭の背後に、様々な方面から影が忍び寄って来るような描かれ方である。
- 13、 叔父との金銭問題の概要が次第に明らかになってくるのに対して、宗助自身の身の上についてはかえって謎が膨らんでいく。東京から京都、広島、福岡へ移動する背景はまったく語られず、「自分の過去に対して」無心を言い出せない境遇という点にも訳ありの感じが漂う。
- 14、 「過去という暗い大きな窖」に落ちる宗助と御米の二人きりの淋しい生活が淡々と描かれ、そのしみじみとした感覚がよく伝わってくるのではあるが、宗助の具体的な仕事の内容や過去そのものについては、この時点でもまだ言及がない。
- 15、 この段に来て、心なしか、文体のリズムが漱石らしくなってきたように感じる。この『門』を、『それから』の延長上で読むのか、別個の独立した作品と読むのか、ということによって内容の理解も大きく変わってくるのであるが、そのいずれにも対応できるように、漱石は登場人物の様々な人間関係に仕掛けを作っているように思われる。
- 16、 叔父一家との関係が次第に詳らかになっていく。しかし、「ああいう事」の正体はまだ明らかにされない。そこに突然の叔父の死。これすらも、一切劇的ではなく、淡々と進行する。この雰囲気こそが、まさにこの作品の基調をなしていると言えよう。
- 17、 小六の、保田から九十九里伝いの旅は、『こころ』の先生と K の旅を思い起こさせる。執筆当時の体調のすぐれない漱石にとって、自らの若き日の闊達な旅として、あるいは万感の思いを込めて想起せられたのかもしれない。

ここでは宗助が小六の真っ黒な姿を眺めている。

- 18、 「廢嫡にまでされかかった」という「あんな事」への具体的な言及はないが、その問題が小六を介して一家の財産問題へも確実に関係してくる。厳しい現実に対して、宗助と御米の空気のような対話がそこはかたなく際立ってくる。
- 19、 推理小説の謎を一つ一つ解いていくように、宗助の周辺事態が次第に明らかになっていく。そして、山気を潜め持つ安之助や、詐欺師の真田のような人物は、いつの時代にも存在する。そこを描き出す漱石の筆致。
- 20、 其一や抱一といった名品の美術鑑賞のあとには父との思い出が、懐かしさのうちに想起される。そのエピソードが展開を見せないまま移ろい、宗助・御米の名状しがたい空気感を持つ夫婦の会話へとつながっていく。
- 21、 宗助と小六の兄弟関係の機微が描き出されている。『それから』の誠吾と代助の関係を微妙にずらし、視点を変えている点が興味深い。そして、この段の最後も、妙に落ち着いた夫婦関係の場面にすっと落ちるように終わるのである。
- 22、 安之助が登場するが、興味深いのは、彼のことがすべて地の文で処理されていることである。そして、この段の最後にも宗助と御米の夫婦の会話が挿入され、それが闇の彼方へと吸い込まれていく。宗助の述懐に見られるような兄弟の非対称性には真実味が感じられる。
- 23、 小六の処遇についてぐずぐずしているうちに、季節が移ろい、秋になるのであるが、ここでようやく作品の冒頭の場面へ戻ることになる。プロットが円環構造を成していたわけであるが、そこに至るまで実に4章を費やすという、漱石にしては息の長い書きぶりである。
- 24、 章が改まり、佐伯の叔母と御米の対話場面から始まる。視点が御米に移ることで、御米の過去も次第に明らかになってくる。家主の大勢の小さい子供たちは、「崖の上」で遊び、騒いでいる。崖の上には異なる世界が展開されるという隠喩。
- 25、 宗助の歯がぐらつき始めることを機に、物語が大きく展開していきそうな予感がする。これまでの低回している日常からは、明らかに異次元へと歩を進めている。宗助ならずとも、この「風吹碧落浮雲尽月上東山玉一団」という対句の禅語には心が動く。
- 26、 物語が新たなフェーズに入ってくると、文体のリズムにも心なしか変化を感じる。描写がより具体的になり、そこに中心的なテーマの一つである金銭問題も適度に絡んでくるのである。それにしても、ここで行なわれるような歯科治療は、当時の最新の技術を取り入れたものなのであろう。
- 27、 宗助と御米の紡ぎ出す独特の夫婦関係は、「そうしてこの明るい灯影に、

宗助は御米だけを、御米はまた宗助だけを意識して、洋燈の力の届かない暗い社会は忘れていた。」という部分に端的に示される。あたかも舞台上のスポットライトに照らされた主演の趣きである。

- 28、 これまで、何らかの過去を抱えながらも、淡々と描かれてきた宗助と御米の夫婦関係が、小六の闖入と新しい命の誕生への予感とで、後戻りできないように、確実に動き始めている。それに合わせて、文体も変化しているように感じられる。
- 29、 夫婦の会話から、過去の関係が少しずつ解きほぐされていく。結婚前の明るい関係があったにもかかわらず、やがてそれぞれが神経衰弱を病み、ヒステリーも起こすという穏やかならざるものへと変化していく。そうした夫婦が崖の下でひっそりとした日常を淡々と過ごしているのである。
- 30、 秋の長雨の描写に、貧しさからくる侘しげな心情が重なる。「崖の上の孟宗竹が時々鬣を振うように、雨を吹いて動いた。」という表現には言い知れぬ不気味さも感じられる。抱一には「月に秋草図屏風」があるが、これは重要文化財に指定されている。果たしてそれが念頭に置かれているのか。
- 31、 御米の活動的な面が、小気味良いリズム感のある文体で描写されている。飄々とした語り口の中に、時折滑稽味を混ぜる文体は漱石ならではのものがある。作中の御米の存在感に漱石自身が触発されたかのようにも感じられる。
- 32、 この手のオークションの話は、現代でもまったく違和感なく受け取ることができる。それにしても、抱一の屏風が当時の中流家庭の1か月の生活費で売買されるというのは驚きである。これでは、海外のコレクターが日本の美術品を買い漁っていくというのも納得のできる話である。
- 33、 第7章の冒頭は印象的な風景描写で始まる。冬の風景を、杉、山、納豆売等から描き出し、台所や炬燵の室内風景に持ってくる視点の移動は新鮮である。また、近隣の家庭を描くことで、宗助夫婦のあり方が浮き彫りになってくる点も興味深い。
- 34、 夜の情景を描かせると他に類を見ない筆致を見せる漱石であるが、この段では御米の視点で描き切っているところが興味深い。なかなか眠りにつけない様子と怪しげな物音とが重なって、現実の世界と夢の世界とのあわいを巧みに描き出している。
- 35、 深更が夜明けに移ろっていくのに伴い、眠れないときの心理状態が妙に安定していくような変化が巧みに描き出されている。御米の視点が、清の動きを挟むことで、宗助の視点に変化していくのも興味深い。牛乳配達も明治の初頭から行なわれていたということである。
- 36、 家周りが細かに描写されている。崖下というばかりでなく、塀や秋海棠のためにさらに日陰住まいになっていることがわかる。そうしたひっそりと

した暮らしの中に突然飛び込んでくる泥棒騒ぎ。そこに泥棒の大便まで登場するのであるから、その落差に思わず引き込まれる。

- 37、 泥棒騒ぎを機に、夫婦だけの関係から周囲へ少しずつ関係性が広がっていく点が興味深い。そして、清や家主の子供たちの姿、あるいは宗助が風呂敷包みを提げる様子が、一種の滑稽味を持って描き出されている。
- 38、 泥棒の話で家主を訪ねたにもかかわらず、視点は家主のほうにばかり向けられている。このような鷹揚なタイプは、漱石の作品の中でも珍しいのではなかろうか。そして、泥棒については刑事の推測が語られるだけで、何の解決も見ないまま終わってしまう。
- 39、 章が改まり、話が小六の視点に移る。障子の張替えという同じ仕事をしながら、自らの境遇の変化からまったく異なる感情を抱き、友人との比較からますます惨めになっていく様子は、学生特有のメランコリーと言えるかもしれない。
- 40、 前節の小六の視点が、今度は御米の視点に変わる。息の合わない小六との障子張りに始まり、小六と差向の午飯の際の御米の気詰まりな心理描写は秀逸である。霧を吹きかけることで皺が取れていく様子は、人間関係の暗喩になっているかのようである。
- 41、 行き詰った関係が、ひょんなことから展開を始める瞬間が巧みに描き出されている。直前の「日を載せた空が次第に遠退いて行くかと思われる」や、「暗い中で粉雪でも醸しているように、日の目を密封した。」などという凝った情景描写に続いて、金銭の話題から会話が流れ出すというギャップがおもしろい。
- 42、 章が改まり、家主の坂井との関係も急速に動き出した。ここでは、崖の上と下という表現が度々登場するが、これが暗喩になっているようにも感じられる。それにしても、家主と借家人の関係はこのようなものであったのかと、改めて驚かされる。地縁血縁が大きく変容していく様子がこうした場面にも示されているのが興味深い。
- 43、 漱石の小説は推理小説のように読み進めることができるとも言われているが、抱一の伏線がここに姿を現わしたのだと納得がいく。円環構造のようなおもしろさとも言えようか。道具屋と家主の坂井をつなぐ線も明らかになり、物語がさらなる展開を始める予感がする。
- 44、 家の間取りは、家族関係にも影響を与える。炬燵や暮方の薄暗さが背景に描かれているが、冬へ向かう時期の侘しさがそれに重なってくる。そして、御米が最初のきっかけを作った抱一の屏風のいきさつが、ここへきてようやく御米のもとへ戻ってくるのである。
- 45、 御米の体調がすぐれないのと対照的に描写されるのは、坂井の子供たち

の生き生きとした様子である。そのつなぎの部分に人形に掛ける小さい夜具の「赤」が印象的に配置される。漱石の「赤」のイメージには特別なものがあり、そこには北原白秋の「曼珠沙華」に通じるような不気味さが潜んでいる。

- 46、 子だくさんの漱石だからこそ、活写ができる場面である。ほとんど自分の子供たちから取材したのではないかと思われるような生き生きとした会話が續いている。その意味で、坂井と宗助は、二人ともがまさに漱石自身の分身であると言えるのではなからうか。
- 47、 読者は、抱一の屏風の顛末を知っているからこそ、宗助と坂井の会話にやにやしながら読み進める。それにしても、三十五円で買い取った屏風を八十円で売るのであるから、相当したたかな道具屋であるが、一方で、宗助自身は坂井の家に置くことによって十倍以上に貴い品と感ずるのであるから、その点では悪くない取引であったと言えるであろう。
- 48、 安之助の取り組んでいる印刷術は、英国の発明家であるフリーズ＝グリーン（1855～1921）が1897年に特許を取った電氣的インキ不要印刷術のことである。電解発色法を用いたものであったが、結局は活版印刷にかわりうるものではなかった。漱石の渡英当時、ジャーナリズムを賑わしていたようである。
- 49、 親族の家に逗留する気詰まり感が徐々に募っていく様子が描かれている。確かに六畳一間だけを与えられて、生活万端を切り回さなければならぬのは、小六本人にとっても辛いものがあるだろう。また、そこを律しきれぬ小六を相手にする御米も、書生などを置くのとは違って、難しい立場にある。
- 50、 御米と小六が近寄っていき、そこに宗助も加わる。情が移り、蟠りが少しずつ溶解していく様子が描かれている。小六の憮然とした姿と、若者特有の不平を持つ姿との対比は、御米ならずとも若干の可笑しみをもって感じられる。そして、冬のさなかに蕎麦搔を囲む温かさが効果的に使われている。
- 51、 調和や安定に向かおうとしていたストーリーの展開に影が差し始める。それが御米の体調であった。自らが病気持ちであった漱石の、病に関する描写は群を抜いている。気候の変化が体調や気分を与える影響や、体調が悪くなり始める際の気持ちのゆらぎが的確な表現で次々に紡ぎ出されてくる。
- 52、 御米の病状が悪化する。症状についてかなり詳細な記述があるので、専門家であれば容易に病名の診断ができるのではなからうか。一方で、素人の読者にとっては、一進一退の症状に一喜一憂し、しかも全体のトーンから不安を募らせていくことにもなる。そのあたりの匙加減が心憎いほど巧みにできている。

- 53、 早打肩というのは聞き慣れないことばであるが、過労が原因のひどい肩こりのことのようにである。夜半に突発的に発症した御米の姿に狼狽する宗助の様子が、緊迫感のある文章で綴られている。酒気を帯びた小六が、一気に酔いから醒めるあたりも、場面の雰囲気がよく伝わる。
- 54、 緊迫した空気から、時間の経過にしたがって次第に落ち着いていく様子が巧みに描かれている。実際、声に出して読んでみれば、わずか5分程度にしかないが、「冬の夜は錐のような霜を挟さんで、からりと明け渡った。」という鮮烈な朝の情景を描くことによって、時間の長さや病の治癒を思わせる点が秀逸である。
- 55、 急に悪くなった病人を自宅に残したまま仕事に出かける宗助の様子がよく描かれている。乗客の少ない電車の風景は、一種独特の雰囲気を醸し出すものである。そして、しんと静まり返った家の中に感じる不安感にも、特別なものがある。漱石は、客観的に状況を描きながら、眠りの深い世界に切り込んでいく。
- 56、 病人との関係性の距離感によって、看病する側の心理がずいぶん違ってくるものであるが、宗助の焦燥感から安堵への揺れが的確に描出されている。漱石の作品には当時の最先端の医学が示されることが多いが、御米に処方された睡眠剤も副作用を抑えた比較的新しいものであった。
- 57、 年の瀬の風景。街全体の忙しさが漂ってくると同時に、それに馴染まない宗助の姿が窺われる。「ぼんやりした懸念」、「茫漠たる恐怖の念」、そして、止まり木の上をちらりちらりと動く籠の小鳥が宗助の心象風景である。髪を刈ることと坂井の家を訪問することで、そこにふとした変化がもたらされる。
- 58、 陽気な坂井の家に、いわば道化の役割を演じる織屋が加わることで、作品のトーンが一気に変わってくる。淡々として、時には重苦しくなっていたこれまでの漱石の筆も、ここでは心なしか軽やかになっている。こうした滑稽味の描出も漱石ならではのものであるといえよう。
- 59、 甲斐の男の話と坂井の家の話に御米も明るい気分になるが、子供の話になった途端に暗転する。この時点で宗助はそれに気づいていないが、このあたりの夫婦間の感性のズレが迫真的である。宗助のことばは、一步間違えればモラルハラスメントにもなりかねないが、これだけ夫婦間の会話が活発である点は注目しておく必要がある。
- 60、 不妊に関する医学的な知見がかなり進展している現在においても不妊治療は決して簡単なものではない。ましてや明治期においては、迷信や単純な経験知から、診断自体も困難であっただろう。そうした文字通り暗中模索の場面での夫婦の互いを気遣う会話には心を打たれる。
- 61、 子宝に恵まれない夫婦はいつの時代にも存在し、さらに流産や死産に見

舞われた際の精神的な痛手の大きさには計り知れないものがある。宗助と御米の過去が明らかになるにしたがって、作品全体の奥行きが深まっていくような構造と、それを読み解く読者の共感を喚起する仕掛けが設けられている。

- 62、 小説でありながら、非常にリアリティをもった死産の様子である。これほど立て続けに不幸が続くことも稀なことではあろうが、それがあつた種の運命に導かれるような感覚を読者に引き起こさせ、逆説的にリアルなものとして迫ってくるとでも言えようか。「臍帯纏落」は、現在では「臍帯巻落」と言い、実際は出産時の三分の一ほどに見られる現象とのことであるから、その意味でもリアリティがあるのであろう。
- 63、 御米の心の闇が吐露される。子供を失うという事実を共有している宗助と御米であるが、実はそこに非対称性が生じてくるという悲しい現実がある。「御米は広島と福岡と東京に残る一つずつの記憶の底に、動かしがたい運命の厳かな支配を認めて、その厳かな支配の下に立つ、幾月日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると観じた時、時ならぬ呪詛の声を耳の傍に聞いた。」の一節は痛切の極みである。
- 64、 季節の移ろいにしたがって変化する御米の心情が描かれている。その先に「文明人に共通な迷信」というものが登場するのも興味深い。そして、易者の判断を仰ぐ御米の姿が痛々しい。「くしゃりと首を折ったなり家へ帰って」という表現がその痛々しさを見事に示している。
- 65、 章が改まり、息の長い地の文が続く。夫婦の関係をこのように掘り下げて書きつづっていくことは前例がないばかりか、その後にも類を見ないのであるまいか。「彼らは山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた。」「彼らの命は、いつの間にか互の底にまで喰い入った。」「彼らは鞭たれつつ死に赴くものであった。」等々の表現には、凄味を感じないわけにはいかない。
- 66、 宗助の闊達な学生時代の話になると、漱石の筆致も明らかに変わってくる。一文が短くなり、リズムカルな文体になっていく。当時、「資産のある東京ものの子弟」が京都へ行くとこのような感じであつたのかという様子が生き生きと描かれている。これがいついかなるきっかけで急転回するのか、読者は気を持たせられながら読み進めていくことになる。
- 67、 若い宗助の外の世界に対する心の持ちようの変化が鮮やかに描かれている。京都と間の土山と東京という三点を配置することで、その心境の変化がより現実味を帯びてくる。宗助にとっては、「消えかかる過去は、夢同様に価の乏しい幻影に過ぎなかつた。」のである。
- 68、 大学生である宗助の会社訪問の様子が描かれていて興味深い。そして、うだるような暑さと、そこで行なわれる一服の清涼剂的な虫干と、立秋過ぎの何とはなく急かる気分とが、順に叙述されていく。二百十日前後に暗雲

が立ち込め、安井の消息がはっきりしなくなったあたりから、話は次のステージへと着実に移っていくことを感じさせる。

- 69、 大学生である宗助の会社訪問の様子が描かれていて興味深い。そして、うだるような暑さと、そこで行なわれる一服の清涼剂的な虫干と、立秋過ぎの何とはなく急かるる気分とが、順に叙述されていく。二百十日前後に暗雲が立ち込め、安井の消息がはっきりしなくなったあたりから、話は次のステージへと着実に移っていくことを感じさせる。
- 70、 いよいよ安井と共にいる御米の登場である。そこに至るまで安井の口からは御米について何も語られない。読み進めていくうちに、不審さとともに事件性が感じられるようになってくる。格子越しに見える姿が初対面というのも、奇しき因縁を感じる出会いである。
- 71、 宗助と安井の間柄が微妙に揺れ動いていくのに対して、宗助と御米とは一足飛びに接近することになる。安井の言からすると、当時は、それがたとい妙齢の女性であっても、兄妹が二人だけで一戸を構えることが尋常に行なわれていたのかと、つい勘ぐってしまう。それにしても初対面のひっそりした御米の描写は印象的である。
- 72、 宗助の回想と単純な過去とが入り混じる複雑な構造になっている。同時に、ここで「運命の力」も予告される。宗助と御米の「二人が門の前に佇んでいる時、彼らの影が折れ曲って、半分ばかり土塀に映った」という風景は、記憶の中であって妙に暗示的、印象的である。キリコの画に出てくるような風景でもあるかのようである。
- 73、 安井と御米と宗助の関係は、三角関係というよりは、三つ巴のような関係であろう。時の流れにしたがって、止まるところのない運動を加速させていく。インフルエンザ程度で、京都から弾かれて神戸方面へ転地するというのも、そのダイナミズムを示すと同時に、当時の医療水準を考える上でも興味深い事実である。
- 74、 ずしりと重みを持った内容を、さらりと描き出す筆致がまさにこの作品そのものという一節である。三つ巴の中の安井の健康の回復と御米の活潑な目遣いとに宗助も突き動かされていく。背景には松の脂の香りや竈の火の色の太陽も配置され、「冬の下から春が頭を擡げる時分」に事が始まるのである。「燄に似た烙印」はホーソーンの『緋文字』を髣髴とさせる。
- 75、 回想の場面が終わり、物語の時間は現在に戻った。大晦日の風景も宗助一家にとってはどことなく淋しいものであるが、それでも年の瀬の世間の浮き立つ様は伝わってくる。ただし、宗助と御米の過去が明らかに語られた後では、ことに人間関係のあり方がこれまでとはまったく異なった形で見えてくる。そして、坂井家との対比もより鮮やかなものとなる。

- 76、 大晦日の風景を描いた作品としては、井原西鶴の『世間胸算用』がつとに有名であるが、漱石の場合は、そこに見られるような風景を少しばかり背景に取り入れながら、明治の新たな色彩をも加味している。そして、何よりも宗助の「一人家を守る静かさ」を際立たせることで、その独自性を打ち出していると言えよう。
- 77、 正月風景が軽いタッチで描かれている。「春らしい空気の中から出」て、「また春らしい電燈の下に坐った」という表現には、新春の浮かれるような気分がよく示されている。袖萩の洒落ことばの趣向が、その陽気さに花を添える。ただし、小六の世代ではすでにそうした趣向がピンとこなくなっていることもわかる。
- 78、 御米にさえ妙に見える、孤独な宗助と社交的な坂井の不思議な交友関係が綴られる。坂井の「洞窟」は、何とはなく漱石山房の一室を思わせるような設えである。その部屋の主の坂井をして「超然派の一人」と言わしめる宗助。二人の人物は、明らかに漱石自身の分身であると感じられる。
- 79、 この『門』という作品には様々な伏線が張り巡らされている。宗助と坂井の対称性は、大きな饅頭にも象徴されるし、料理屋の芸者の論語の話は宗助夫婦の過去を暗示している。小六をめぐる学校教育と社会教育の関係は、現代社会に通底する志向を備えている。そして、芸者の『ポケット論語』や、書生という制度というものは現代化された社会を逆照射しているように思えてならない。
- 80、 作中では、かつて伊藤博文の死が語られ、小六の大陸志向が言及されていたが、ここへきて坂井の口から彼の弟が満蒙の地を漂浪していることが述べられる。『満韓ところどころ』に描かれた大陸の様子を背景に、物語世界は急速に広がりを見せているのであるが、「宗助は其所で辞して帰ればよかったのである。」という気になる一文が差し挿まれている。
- 81、 蒙古の話は非常にリアルな印象を与える。1909年に漱石は満州・朝鮮を旅行したのであるが、直接蒙古の地に足を踏み入れずとも、満鉄総裁の中村是公などから、現地でしか聞けないような話をいろいろと耳にしたことであろう。そのリアルな感覚が作品に息づいている。そして、背景世界と宗助の好奇心が最大に広がったところで、突然安井の名が出てくるのである。
- 82、 「幽霊のような思」を抱く宗助と御米は、安井のことで胸を痛めつつも、「月日という緩和剤の力だけで」、その生活が「淋しいなりに落ち付いて来た」ということになる。その「甘い悲哀」が、「詩人や文人などよりも、一層純粹」であると、文人である漱石が、「信仰」という語を仄めかしながら記している点が興味深い。
- 83、 偶然の度のあまりの甚だしさに宗助は寝込んでしまうのであるが、それ

を描き出す漱石の視点が興味深い。事実は小説よりも奇なりとは人口に膾炙するところであるが、いったん日本を離れると意外に人間関係が狭まり、簡単に人と人がつながるものである。漱石自身も、英国留学や満韓の旅行を通して、そのような事例を実際に経験していたのではあるまいか。

- 84、 から風が吹き荒ぶのは、宗助の心象風景でもある。仕事をしていても落ち着かない様子が、「不必要な墨を妄りに磨り卸」すという動作にもよく表れている。寄席へ行っての気分転換も上手くはいかない。現在の寄席は落語が中心であるが、当時は義太夫も重要な演目であったようである。それに真剣に聴き入る御米の姿を偷み見る宗助の様子は、映画の1シーンを見るかの如くである。
- 85、 宗助の心の変化が鮮やかに描かれている。怖いもの見たさが起こる半面、そこに躊躇する自身を見出す。安井を盗み見する自身を想像し、それが家へ近づくにしがって萎えてきて、とうとう牛肉店に上がって酒の力を借りる羽目に陥る。そして、このような悩みは、おそらく思いもよらないところから急転回することになるのではなかろうか。
- 86、 御米との会話の中に「信仰」ということばが登場し、ここではそれが「宗教」、さらに「坐禅」へと具象化してくる。それにしても、坐禅をする「級友の動作が別に自分と違った所もないようなのを」見てとる宗助ではあるが、自分を救うための方法として坐禅を考えるのであれば、それは決して首尾よくはいかないものである。
- 87、 例のような人と物との対比で、例にない状態の下の宗助が明瞭に描かれている。にもかかわらず、御米との会話は、目立ってぎくしゃくするわけではない。そして、睡眠と覚醒のあわいの描き方は漱石ならではのものである。そこでは、彗星のイメージが、聴覚と視覚、現実と夢の中で展開されていくのである。
- 88、 山門に入る宗助。そこから、それへ至る顛末が述べられる。漱石は 27 歳のときに鎌倉・円覚寺の塔頭である帰源院に参禅し、その 3 年後にも同寺を訪れ、さらにその 15 年後に再び訪問している。最後の訪問については、『初秋の一日』 (<http://goo.gl/Gx6cvt>) に描かれている。そして、円覚寺仏...
- 89、 宗助が山門を入れて、寺の中の陰気な空気に触れる。ところが、目当ての一窓庵は、日当の好い、丘はずれの高い石段の上にあった。崖の下に位置する宗助の家とは対照的である。そして、若い釈宜道との邂逅も宗助には意外の念を起させる。それにしても、漱石が作品の執筆のために、直前に鎌倉に取材した形跡はないようなので、描かれている寺の風景は、漱石の 15 年以上も前の古い記憶をもとに創造されたものであるという点が興味深い。
- 90、 宜道と宗助の会話はごく普通のものであるが、宜道のしとやかな様子に

は宗助も考えさせられている。そして、様々な居士の話も聞く。古来、禪林においては、こうした飄逸の話も多々見られるが、宗助のように何かを求めて山門に入る人々とは鋭い対照をなす点が重要である。宜道の「気楽ではいけません。」ということばも、その点において重みを持つてくる。

- 91、 宜道と宗助の会話はごく普通のものであるが、宜道のしとやかな様子には宗助も考えさせられている。そして、様々な居士の話も聞く。古来、禪林においては、こうした飄逸の話も多々見られるが、宗助のように何かを求めて山門に入る人々とは鋭い対照をなす点が重要である。宜道の「気楽ではいけません。」ということばも、その点において重みを持つてくる。
- 92、 坐禅を行なう際に、雑念が次から次に湧き出てくるのは致し方のないことである。その雑念といかに付き合うかが肝要なのであるが、やはり在家の居士は数息観から入るのが穏当であろう。また、半跏であると確かに姿勢が悪くなってくる。だからと言っていきなり結跏を組むと、足の痛さが尋常を通り越して、坐禅中に叫び声をあげたくなるほどである。いずれにしても、にっちもさっちも行かないところへ追い込まれていくのである。
- 93、 「要領を得る捷徑」などと考えると、禪僧からは当然一も二もなく排斥されるものである。現成公案ではないが、禪寺の規律に従って坐禅に取り組んでいると、そもそも本を読もうなどという気も起らない。初心とはいえ、朝寝をしたり、宜道に食事の世話を任せっきりにする宗助の取り組みは、何とも心許ないものである。
- 94、 漱石が『門』を執筆したのは、実際に参禅してから 15 年も後のことであるが、その描写や宗助の心情の変化が経験したてのことであるかのように、非常にリアルに感じられる。そして、宗助が縁側に出て見遣った穏やかな空が、「蒼い光をわが底の方に沈めつつ、自分と薄くなって行くところであった。」と描かれている部分に来て、ハッと、漱石の深みに至る長い道のりを瞬時に感じ取ることができた。
- 95、 夜の静寂が痛いくらいに迫ってくる描写が続く。そして、室には峻刻な様子をした男たちが肅然と坐っている。鳴り物の響きに合わせて、彼らは肅々と老師に相見する。こうした沈黙の風景を、ことばの限りを尽くして描写する漱石の筆致というのは、ある意味で逆説的であるからこそ真実なのである。
- 96、 「もっと、ぎろりとした所を持って来なければ駄目だ」という老師のことばは鮮烈である。公案に対する見解は一人一人によって異なるし、老師との関係性によっても難関を通過できるか否かもまったく定かではない。そうした点も含めて、漱石自身がこの参禅の過程を作品の中で詳述することの意味を改めて考えさせられる。

- 97、 禅寺で少しでも寝起きた経験があると、宜道のような修行僧の存在が妙にリアルに感じられる。特に臨済禅の場合、あえてその道を選ぶだけあって、各僧の出自は多様であるし、師家も個性のまったく異なる弟子を擁することが多い。そのような中で、在家の立場で「最初を一つ奇麗に打ち抜いて置」くことの難しさは、たとえようもないものである。
- 98、 宗派によって誦し方に違いはあると思うが、朗読にも節を付けてみた。それにしても、提唱の作法や講者の話の展開などは百年を経てもまったく変わらないもので、おそらく数百年、あるいは佛祖以来、このような形で法灯が受け継がれてきたと実感できる。漱石がそれほど多くはない参禅体験の中から、本質をえぐり出すことばを紡ぎ出しているのは驚くべきことである。
- 99、 公案を与えられたことがないのでよくわからないが、考えれば考えるほど、自らの考えにがんじがらめになっていくことはよくわかる気がする。特に「理屈から割り出した」ものではなおさらであろう。雑念を出るにまかせ、数息観に徹すればもう少し気が楽だったのではないかと思う。
- 100、 作品のクライマックスとなるべき参禅体験であるが、結局、何事も起こらずに終息した。しかし、逆説的に考えれば、何事も起こらないクライマックスというものを漱石が当初から措定していたのかもしれない。宗助は理に生きる人間として、まさに「門」に臨んだのである。開かない門もまた門であるという傍観者的な自己認識に至ったとでも言えようか。
- 101、 脱俗の世界から世俗の世界に戻ったときの、何とも言えない妙な空気感が巧みに描かれている。「どこかに卵を抱く牝鶏のような心持が残って」というのは言い得て妙である。そして、御米のことばで「始めて一窓庵の空気を風で払ったような心持」となる宗助。にもかかわらず、安井のことが固執低音のように頭から離れないのである。
- 102、 気になる坂井の懐に飛び込んでいく宗助。ある意味で、この行動を自ら起こすこと自体が、坐禅の成果とも言えるかもしれない。愉快的空気の坂井家の団欒と、対照的な主人の「洞窟」。さらに首尾よくすれ違う安井と宗助。こうした様々なベクトルのうちに辛くも世渡りを続けていく宗助の姿が、淡いタッチで描かれていく。
- 103、 磊落な坂井の主人の話が続く。銀婚式の夫婦の話から、運悪く殺されてしまう蛙の夫婦へと大きな飛躍は見せるが、天の事は天に任せる以外はないという方向へ収束していくかのようなのである。「死屍累々」というところに、日清日露の戦争がもたらした悲劇が影を落としているようにも感じられる。
- 104、 長閑な春の日の中、「うん、しかしまたじき冬になるよ」という宗助の皮肉とも諦めともつかないことばのうちに『門』も最終回となった。世事の転変の裡と確実に繰り返される季節の移ろいの中に「父母未生以前本来の面

目」が躍如しているのを、鶯の一声が告げに来たとでも言えるのではなからうか。